

人間として成長できる授業をめざして  
— 一人一人の学びを深める話し合い —

所属校：豊島区立駒込小学校  
氏名：丸山悦子  
派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：かかわり・一人一人・学び・自己更新・認識・聴き合う・子ども理解

## I 研究の目的

人間は様々なかかわりを通して人間として成長していく。しかし近年、人と人のかかわりの希薄さ、かかわり方の不十分さ＝コミュニケーション不全が問題視されるようになってきている。この問題に対処すべく、コミュニケーション教育に関わるものとして平成10年版の学習指導要領国語科編で「伝え合う力」という言葉が目標に加わり、「話すこと・聞くこと」が3領域の先頭に位置付けられ、内容として「話す」「聞く」「話し合う」ことが加えられ、体験活動とともに重視されることとなった。このことは新学習指導要領においても同様に重視されており、国語のみならず各教科・領域において話し合い活動が取り入れられている。しかし、自身の授業を振り返った時、その話し合いは本当に豊かなかかわりになっていただろうか。

そもそもコミュニケーションという言葉はラテン語：communicatio に由来しており、「分かち合うこと」を意味している。コミュニケーション能力とは互いに理解し合い信頼関係を築いていく能力であり、相互理解を前提としている。逆にいえば、お互いを分かり合おうとする心がなければコミュニケーションとは呼べないのである。授業においてコミュニケーションは成立していただろうか。ただの発表し合いになってはいなかっただろうか。

本研究では、先行研究を行っている公立A小学校の実践を参考に、この「話し合い」というかかわりに焦点を絞って、人間としての成長に結びつくコミュニケーションの場としての「話し合いの授業」とはどうあるべきかを探っていきたい。

## II 研究の方法

公立A小学校の実践や教職大学院での学びを通して「人間としての成長につながる学び合い」が成立する条件を次の観点から探っていく。

- ・子供たち一人一人の学び
- ・自己更新の契機としての話し合い
- ・教師のはたらき

## III 研究の結果

### 1 子供たち一人一人の学び

話し合いというと、集団での学習の場面にばかり注目してしまいがちである。しかし、話し合いは個々の学びの相互交流である。一人一人の子供に確かな学びが成立していなければ、話し合いはただの発表し合いであり、相互交流にならないのである。そこで、まずは子供たち一人一人の学びについて考えたい。

#### (1) 自己更新

人間として成長するということは、自己更新していくことである。自らが、今ある自分を見つめ、把握し、物事の見方や考え方を深化・拡充していくことである。「自分を見つめ、把握する」とは、自分が今、何の事柄について、何をどのように考え、何が分かっており、何が分かっていないのかに気付くなどの理知的な側面を認識することであり、自分がどう感じるのか、どうしたいのか、何にこだわりたいのかなどの情意的な側面を認識する（これは認識を認識することを意味する）ことである。理知的な側面を認識することが見方や考え方、学習方略などを向上させることにつながり、情意が学習活動そのものへのエネルギーとなり、主体的な学習者への出発点となる。

#### (2) 一人一人の学び

これまで私は、教師が教えたことがそのまま子供たちの頭の中に知識として定着するような感覚を抱いてきた。しかし実際は、学びは全員に一斉一律に成立するのではないようだ。『知識』というものは、こちらが一方的に「与え」たり「伝え」たりできる代物ではない。子どもは常に自らの内なる問いかけにもとづいて、外界の知識を彼なりに関心のあることに対する「答え」として受けとめ、また、自ら新しい様相につくりかえて、自分で一番扱い易く利用し易い形態に変形してしまうものなのである。」

教師が子供たち一人一人の学びをいかに把握するかが重要であり、それぞれの学びを基軸とする支援・指導をすべきである。

#### (3) 一人一人の学びを育てるために

##### ① 学ぶ意欲を育てる

能動的に考える経験を積み重ねる。こだわりを大切に自分で追究し自分なりの納得を得ると

いう体験を積み重ねることが大切である。また、生活の中で感じたことや疑問などを気軽に話す機会を継続的に設け話すことに慣れさせるとともに、生活に引き寄せて考える素地を作る。さらに、友だちの話聞きそれについて自分はどう思うのかを問う習慣をつけ、かかわりを意識付けるとともに、自分というものを意識させる。

## ② 学習方法を工夫する力を育てる

子供たちはそれぞれに生活経験、興味・関心、考え進める方法などが違う。自分なりの方法で問題に取り組むことが大切である。この方法ではうまくいかない、こうしたらうまくいったなど、自分なりの方法とその結果を自覚させ、よりよい方法を見つけ出せるようにする。

## ③ 自己評価の力を育てる

問題が解けたかどうかという結果や話すこと（聞くこと）ができたかどうかという目に見える態度や行動面ではなく、どのような方法で、何を学び、何を思ったのかを記録し、振り返る習慣をつける。自分の学びを自覚させると共に、次なる学びへの足掛かりとする。その際、自己否定につながる評価で終わることのないよう、良い点に気付かせたり、どうすれば改善されるかを共に考えたりする支援が必要である。

## 2 自己更新の契機としての話し合い

話し合いを、他者との学びの交流を通して自己更新を図る大切な契機ととらえる。

### (1) 学びの交流

教師が一人一人の子供たちの学びを高めるためのねらい（ある程度自分の考えに満足してしまっている子には安定状況を打破するために、どのように考え進めたいのか迷っている子にはヒントを得させるために、狭い視野で考え進めている子には新たな視点に気付かせるために、など）を明確にして話し合いを行う。それぞれの考えが全体に広がっているか、ねらいを達成するためにこだわるべきところはどこか、個が生かされているかなどに留意しつつ、受容的な雰囲気の中で子供たちが語り合うことを大切にする。

### (2) 聴くことを重視

一人一人の学びが基軸にあることで、より相手を意識して自分と比較しながら聴く構えができる。聴くという行為は他者の話をただ受け取るという受動的なものではなく、能動的行為である。正解を出すことを急がず、よりよい話し方でより多く話すことを求めるよりも、まず聴き合うことを重視する。

- ① どのように考えたのか、なぜそう考えたのか、相手を理解しようと聴く。
- ② 自分の考えと比較し、違う視点や方法を見つけ出そうと聴く。
- ③ 自分の考えと比較し、自分の学びを確かめるために聴く。

このような聴く姿勢を身につけさせるために、まず教師が子どもたちの声（外言・内言）に耳を傾ける。

## 3 教師のはたらき

### (1) 子供を見る

目に見える側面、点数化できる側面だけではなく、

- ① 何に興味・関心を持っているか。
- ② 問題をどう追究しているか。（視点、考えのよりどころとしているもの、考えを練り上げる方法など）
- ③ 何をきっかけとして見方や考え方を変えるか。
- ④ 自分の学びをどうとらえているか。
- ⑤ どのような方向へ進もうとしているか。

など、一人一人の個性ともいべき傾向性を見ていく。授業時間内に学びが始まり、そして終わるわけではない。その時に生じた疑問がじっくりと時間をかけて熟成され、何かをきっかけとして解決したり、次の学びへと発展したりする。子供たちが瞬間、瞬間に見せる姿をその場限りのものとして見るのではなく、生活全体とのかかわりの中で見ていく。

### (2) 子供に寄り添う支援・指導

子供たち一人一人がそれぞれに伸びていく方向性を見極め、寄り添い、必要な支援・指導をしていくという姿勢を持つ。

- ① 子供の問題や悩みを共感的にとらえ、取り組み方を共に模索する。
- ② 見方が変化していることに気付かせる。
- ③ その子が進む方向を複数予想し、対応する。
- ④ 自己への気付きを評価する。
- ⑤ その子自身の言葉や考えを大切にし、答えを急がない。

## IV 考察

一人一人の学びが確かにあって初めて話し合いが豊かなかかわりとなり、そのためにはより深い子ども理解が重要であることが分かった。また研究を始めて1年目であり、ようやく方向性が見えてきたところである。一人一人の学びを支える支援・指導の在り方や話し合いでの教師の役割などについてさらに研究を深め、実践を通して検証していきたいと思う。

（引用文献）「学び」を問い続けて—授業改革の原点—（佐伯胖/小学館）